美濃加茂市立太田小学校だより　第７号

大銀杏

令和６年９月２７日　発行

～太田小学校は「FROM-０歳プラン２」を大切にした教育活動を進めています～

コウモリの目

～ 心に“えんがわ”を ～

校長　梅村　高志

■お盆休みに初めて京都の『天橋立（あまのはしだて）』を訪れました。日本三景の一つで、6,700 本もの松が二つの海を分けるかのごとく伸びる風景は圧巻でした。私は以前から興味のあった「股のぞき」に挑戦しました。文字通り、股の間から顔を出して景色を逆さまに見るという風習です。空と海と大地がアベコベとなる不思議な感覚を味わいながら、ふと思ったことがあります。「普段、あたりまえのように自分の目に映るものが“すべて”だと思い込んでいないだろうか。別の人にはもっと“違う何か”が見えているのかもしれない・・・」

■同時に若い頃、先輩から教えていただいた言葉を思い出しました。

「物事を“４つの目”をもって眺めると、違った世界が見えてくるよ」

◇虫の目・・・小さな虫のように、近くから物事を注意深く観察する目
◇鳥の目・・・空を飛ぶ鳥のように、高い所から全体を見わたす目
◇魚の目・・・水の流れに従って泳ぐ魚のように、時代の流行を読む目
◇コウモリの目・・・ぶら下がるコウモリのように、いつもとは逆向きの視点をもち、いったん立ち止まって物事をとらえる目

■道中ふらりと立ち寄った喫茶店で、何とも言えない贅沢な気分にひたりました。流れてくるアナログレコードの“ふくよか”で温かみある懐かしい音質に魅了されたのです。壁に飾られた名盤ジャケットの数々に思い出を重ねながらマスターとしばし雑談。「デジタルでは表現できない、“針”を落とした瞬間の音の響きがたまりません。その“ひと手間”に魅力を感じる若者もずいぶん増えましたよ。無駄に思えることや置き去りにされた古きものにも良さがひそんでいるんです。」コウモリの瞳を輝かせた実に粋なマスターでした。

情報化の渦にもまれ、効率やスピードが重視されがちな時代にあって、私はあえて目的地に真っ直ぐ向かう旅やメニュー満載なツアーよりも、予期せぬものに期待しながら“道草を食う旅”に惹かれます。コロナ禍で耳にした言葉を借りるならば、“不要不急な旅”でしょうか。

■この日お世話になった古民家風の旅館に、今は懐かしい縁側（えんがわ）を見つけました。座布団に腰を下ろしながら、俳優だった故 森繁久彌さんのエッセイ『えんがわ』の一節が頭に浮かびました。

「えんがわ ―― これは一見、住まいの“ムダ”と見える。そのために今風の家には一切ない。
しかし、えんがわは簡易応接室であり、雨天体操場であり、おばあちゃんのサンルームである。
えんがわのある家に住んだ頃は、人々も“心”にえんがわを持っていた。心の幅なのであろう。」